

カトリック六甲教会 教会報

2010

8

No.464

フィリピンへの出発にあたって

助任司祭 片柳

2008年3月にカトリック六甲教会に着任してから2年半が過ぎ、いよいよ皆さんとお別れする 때가 迫ってきました。9月からわたしは、イエズス会の第三修練に入ることになっています。

1. 第三修練

第三修練というのはイエズス会の養成の最終段階で、会の精神をもう一度深く勉強しなおし、大黙想という1ヶ月間の祈りのときやさまざまな実習の中でしっかりと身につけるための期間です。世界中の色々な場所で行われていますが、わたしが参加する第三修練はフィリピンのマニラで今年の9月5日に始まり、来年の3月5日に終わります。

この期間、わたしはマニラにあるアテネオ・デ・マニラ大学というイエズス会の大学の中の共同体で過ごします。そこから、スラム街や農村での実習、大黙想などに出かけていくことになります。

実習は楽しみなのですが、かつてフィリピンで第三修練をしたある神父さんはヘリコプターで三方が崖、もう一方が海という陸の孤島のような漁村に運ばれたと聞きました。ヘリコプターのパイロットは、彼を下ろすと「じゃあ、1カ月後にまた来るから」と言って飛び去ってしまったそうです。普段生活している世界から完全に離れて、もう一度、福音宣教の使命を見つめなおしなさいということでしょう。皆様のお祈りによる支えが、本当に必要だと思います。

2. ミサを大切に

六甲教会で学んだことはたくさんありますが、何より一番強く印象に残ったのはミサの大切さということです。本当に真剣に一回一回のミサに与り、真心をこめて祈るみなさんの姿を目の当たりにして、わたしはミサの大切さを強く実感しました。その姿を見るたびにわたしは、「この方々のためにミサを立てるのに必要な恵みをどうぞお与えください」と神様に心から祈らざるを得ませんでした。司祭の最大の使命はミサを立てることにあると、今わたしは確信しています。フィリピンでの第三修練によって、ミサを立てる者としてよりふさわしく変えられていくことを心から願わずにいられません。

この他にも学ばせていただいたことはたくさんあり、感謝に限りはありません。未熟な新米司祭のわたしをここまで支え、育てていただき本当にありがとうございました。またいつかお会いできる日を楽しみにしています。



(第四回) キリストの愛のしるしである目に見える証 (秘跡)

本来、教会での結婚式は“信者同士”で行われるものでした。しかし、カトリック信者の少ない日本では、信者同士の結婚式はごく稀であり、大半は信者と未信者の結婚式が多いのです。その為に、日本の典礼委員会は、司教団と相談しヴァチカンの典礼省に“信者と未信者”の結婚式を教会で出来るよう請願した結果、承認されました。但し、条件として信者・未信者の結婚式は、秘跡ではなく祝福式ということ。またその場合、未信者側から“約束書”の承諾をもとに許可することになっています。その内容は、①カトリックの信仰を常に忠実に守ること(未信者の方は信者の信仰を遵守)。②生まれてくるすべての子どもが、カトリック教会で洗礼を受け、信仰教育されるよう最善の努力をすること。この約束書と婚姻障害免除書(異宗婚の障害を免除)の提出を必要としています。

さらに日本では、未信者同士の結婚式の申し込みが 1980 年代に入り全国的に殺到しました。そこで日本の司教団は、福音宣教の一環として未信者同士の結婚式も出来るようヴァチカンの典礼省に申請した結果、特別に、挙式までにキリスト教の基礎知識も含めた講座を受講することを条件として、教会での挙式の許可を受諾しました。これが現在も各小教区内で行われている結婚セミナーであります。勿論、この結婚セミナーには信者、未信者を問わず教会で挙式するものすべて受講する義務があります。当然のこととして、信者同士の結婚式は秘跡となり、信者・未信者、未信者同士は祝福式となりますが、いずれも神様からの大いなる祝福の恵みに与る挙式として実施しています。

婚姻の秘跡

この秘跡は、他の秘跡と異なり、日常生活のあらゆる側面、つまり、人間関係と社会的責任、経済、感情、性などを一つにします。婚姻は、「生活と愛の深い共同体」であり、「配偶者が互いに自分を与え、受ける」と言われます。「婚姻の秘跡によって配偶者に出会い、キリストが教会を愛して自分を教会のために渡したように、キリストが彼らのもとに留まる。真正な夫婦愛は神的な愛の中に取り上げられる」。「婚姻制度と夫婦愛とは、子どもの出産と教育に向けて定められている」と教えています。

キリスト信者同士の婚姻の誓約は、イエス・キリストによって秘跡の尊厳にまで高められ、信徒にとって結婚は特別な秘跡であります。

主任司祭 松村



片柳弘史神父様

ありがとうございます！お元気で！また会う日まで！

9 月からイエズス会第 3 修練のためにフィリピンへ出発される片柳神父様に、特に親交の深かった方々から代表して感謝とお別れのメッセージをいただきました。

★「心に残った片柳神父様のお話」

私の片柳神父様との思い出の中でも、特に印象に残ったことは2つあります。

1つ目は「子どもと共にささげるミサ」です。ミサの中のお説教では、私達に分かりやすくお話して下さいました。その中でも、善いサマリア人のお話のお説教が心に残っていま



す。おかげで私は聖書のお話に近づくことができました。

2つ目はマザー・テレサのお話です。マザー・テレサのカルカッタでの活動を、ビデオや写真で見たり、実際に神父様からお話を聞いたりしました。身分制度で苦しむ貧しい人々にも、平等に接するマザー・テレサが印象に残りました。

片柳神父様から沢山の大切なお話を聞く事ができました。次回お会いする時には、フィリピンでのお話を沢山聞きたいです。これまで本当にありがとうございました。
(教会学校 6年 藤本)

★片柳神父様が六甲教会に来られてからの約2年半、本当に2年だったのだろうかと思うくらいたくさんの時間を一緒に過ごしたように思います。笑いあり、笑いあり、感動あり！の日々でした(笑)

その間、神父様は私たち青年会、教会学校、中高生会などで活動する20代30代の若者と、周りのたくさんの方々を結んで下さいました。私たちと教会の諸先輩方を結び、他教会の若者たちとを結び、プロテスタントの牧師さんや若者たちとも結んで下さいました。

マザー・テレサの言葉に『わたしにはできないことが、あなたにはできます。あなたにはできないことが、わたしにはできます。力を合わせれば、神さまのために何かすばらしいことができるでしょう』というのがあります。神父さまの何でも参加しよう！何でもやってみよう！精神を引き継ぎつつ、神父様が結んで下さったいろんな世代の方々、他教会、他教派の方々と、もっと太く長くつながり続け、一緒に神さまの愛を伝えていきたいと思います。

神父様、またお会いできる日を心から楽しみにしています。本当にありがとうございました。

(教会学校 リーダー 前田)

お疲れ様でした！！

時の流れの早さを感じる今日この頃ですが、片柳神父さんが六甲に来られて、早2年半になるのですね。取りあえず「ご苦労様でした！」と申し上げたいと思います。神父さんは私の息子と同じくらいの年齢なので、神父さんと接していると、つい父親的な気分になり、時にはその行動に危なっかしさを感じたりしたのも事実です。しかし、教会学校、青年会と思存分その若さを発揮され、活躍されたことに感謝しております。

高齢化の進む教会において若者、子供たちの活気ある声が響き渡るのは素晴らしいことだと思います。

2年半の六甲生活はいかがでしたか？桜井、松村両主任司祭に仕え、時には厳しい？言葉にも耐え、更に多くの信徒の難しい要望にも応えられ、この2年半は十分修練されたことでしょう。ここで鍛えられたら、どこへ行かれても通じますよ。(笑い)

最後にご健康にはくれぐれも留意され、いい修練を積み、一回りも二回りも大きくなって日本に帰られることを心からお祈り申し上げます。本当にありがとうございました！！

時々フィリピンの満天の星空の下で、我々のことを思い出して下さい。

(蛭田)



叙階の後の初ミサを
立てられる片柳神父

Thank you & See you, やぎい神父様 !!

♪♪ パイプオルガンお披露目「感謝コンサート」と献金のお願い ♪♪

この度、日本基督教団「東梅田教会」が創設 120 周年の記念行事として、新規にパイプオルガンを購入されるに当たり、永年礼拝に使ってこられた“辻オルガン”を譲っていただきました。

既に移設して 1 か月半経ちましたが、オルガンチームではこれからも大切に使用して頂く感謝の気持ちを込めて、9月4日(土) 15:00~16:30 当教会主聖堂で「感謝コンサート」を企画致します。(詳細は後日ポスターや週報でお知らせします。)

つきまして、「オルガン演奏会」開催に先立ち、東梅田教会のご好意に対して、皆様から献金を募り、コンサートにお越し頂く東梅田教会小豆牧師に当日お渡ししようと考えています。

募金活動は8月1日(日)からを実施致しますので、上記主旨をお汲み取りの上、皆様のご協力よろしくお願ひ致します。

オルガンチーム長 馬場

∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞ 各部だより ∞∞∞∞∞∞∞∞∞

📖 教会学校

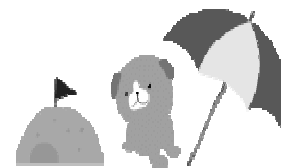
8/6(金)~9(月) キャンプ(兔野高原) お祈りください。
21(土) 納涼の夕べ(5時ミサ後)
22(日) 片柳神父様 教会送別会(10時ミサ後)

📖 社会活動部

次回連絡会: 9/3(金) 婦人会例会後

📖 典礼部

1. 先唱マニュアルを一部見直しいたしました。先唱の方はマニュアルをご確認ください。
2. 8月22日(日)片柳神父様送別会終了後「朗読奉仕者の勉強会」
マイクの使い方を確認し、会衆にどのように聞こえているか互いに聞き合うことを趣旨として開催。マイクを通じた聞こえ具合の確認なので、先唱の方も是非ご参加ください。



《 お知らせ 》

★社会活動部より★

夏休みのお知らせ

8月4日(水) 手芸の集い お休み
8月14日(土) 炊き出し お休み
8月15日(日) ミニバザー お休み

★養成部より★

平和旬間合同礼拝

8月8日(日) 13:30~
説教:「平和はわたしから」
近畿福音六甲ルーテル教会 松田聖一牧師

神戸地区平和旬間行事

1、第4回“広島平和への道”巡礼

8月5日(木)

17:15 平和公園内・原爆供養塔前で「祈りの集い」

聖書朗読リレー

8月28日(土) 7:45~18:00

新約聖書「ヨハネ福音書」以降を読みます。
ご希望の時間帯で15分程度の朗読です。

18:00 記念聖堂(地下聖堂)での祈りの集い
19:00 平和祈願ミサ(20:15閉祭予定)
巡礼は4コースあります。委細はチラシをご覧ください。

申込書にて、奮ってご参加ください。



2、ピアノ弾き語りコンサート「りゅうれえんれんの物語」

(無料・整理券あり)

8月14日(土)

時 間: 13:30～ (開場 12:30)

開催場所: 神戸中央教会 聖堂

ピアノ・歌: 沢 知恵



📖 図書紹介

『8月6日の朝 ぼくは14歳だった』

長谷川 儀 著(女子パウロ会)

この本は被爆体験を持つある司祭の自分史である。著者は体験を語ってほしいと講演依頼を受けたりするが、とても限られた時間内では語り尽くせないと思い記録に残された。

爆心地から2キロメートル離れた地点で被爆した彼は、身体半分、熱線による外傷で流れ出る血膿に加え、全身衰弱、誰の目にも死は確実と思われる状態にあった。その時、目には見えない不思議な力が働き、ドイツ出身のパウロ・ネーベル神父を通して、もう一度この世に生きることとなった。その時の様子を記録した文章は、3、4ページにわたるが、とても神秘的で感動的だ。この原爆投下の地獄のような世界にあって、神の指が働かれ、奇跡的に回復した少年が、後に司祭への道へと進まれた。そして今、ある教会の主任司祭をされながら、平和のために働き祈りつづけておられる。

終戦より65年が経った今、是非、この本の一読をおすすめします。

(釜田)



オーバーアマガウを旅して

司祭 安芸

6月16日(水)より24日(木)にかけて、ドイツ、オーバーアマガウの「キリストの受難劇」の巡礼に行く機会に恵まれました。巡礼は大きく二つに分けられ、前半は「キリストの受難劇」鑑賞、後半はドイツの教会巡りでした。

受難劇は10年に一度、オーバーアマガウの村人2500人(村の人口5000人)で演じる素晴らしい受難劇でした。それは休憩時間も入れて9時間位かかる長い劇で、観る者を信仰の世界に深く引き込ませていくものでした。その最後の場面は、イエズス様が二人の盗賊に囲まれて、十字架上で最後の息を引き取る情景をリアルに表し、私達を信仰の深みに引き込んでいくというものでした。

劇を鑑賞した翌日は、多少の休みを取り、ドイツのアウトバーンを一路ケルンに向かいました。途中、鞭打たれた救い主の像で有名な「ヴィースの巡礼教会」を訪れました。ケルンのホテルに泊まって、午前中ケルンの大聖堂で主日のミサに預かりました。午後は大聖堂を見学し、その後ローマ・ゲルマン博物館、レックリングハウゼン・イコンミュージアムを訪れました。次の朝は早起きしてボンへ。バートベンの家、戦後の初代独首相アデナウワーの家(現在博物館)を巡り、その後「マリア・ラーハ修道院(ベネディクト会)」を巡り、ドイツの深い信仰の一面に触れることが出来ました。

翌日は「マインツ大聖堂」を訪ね、そこの大司教が大きな式がない時、一人でミサを捧げられる小聖堂で私達

だけのミサを捧げることが出来ました。そして、私達巡礼の大きな恵みを思い浮かべながら、感謝の祈りを捧げました。後半はライン下りを楽しみ、美しい川べりの景色をゆっくりと眺めながら、ローレライの岸壁などを満喫しました。その晩は、フランクフルト郊外の温泉で有名なバートホンブルクにて最後の夜を過ごし、翌日午前中フランクフルト市内をバスで遊覧し、ルフトハンザ直行便で日本への帰路に着きました。

このすばらしい巡礼を体験することが出来ましたことを神に感謝！！



キリスト受難劇（写真は you tube より）



家の壁にはフレスコ画が描かれている。絵の題材は童話か宗教画。

小さな村であるが独特な雰囲気の流れる魅力的な村。

「キリスト受難劇」を鑑賞して

折川

今年6月16日より9日間の予定で、10年毎に村人だけで行われるオーバーアマガウのキリスト受難劇を観にゆく機会がありました。団長、兼、指導司祭は安芸神父、参加者は23名の楽しい巡礼旅行でした。それぞれが信仰の深い人、聖書に詳しい人、教会活動に熱心な人、いろいろ得意分野をお持ちの人たちでした。



新旧キリスト教徒が争う30年戦争に続いて、1633年南ドイツアルプスの麓の小さな村オーバーアマガウも黒死病(ペスト)に襲われました。ヨーロッパの人口の3分の2が犠牲になったという。村人達は10年毎にキリストの受難劇を行うことを約束して、この流行が早く収まることを神に祈った。その結果翌年1634年になると1人の患者も発生しなくなった。そうしてキリスト受難劇(パッション・シュペーレ)が始まった。

18世紀末の宗教改革の一時期を除いて中世宗教様式から、バロック調の見世物、19世紀のリアリズム調など、時代を映して変化してきているが、現在も続いている。戦前ナチスに利用された時期もあったらしい。

この劇の第一部は2時30分に始まり、3時間。第二部は7時30分から3時間かかった。現在の村人5,350人のうち2,200人が参加している。劇は各幕が開く前に活人画といって、旧約聖書の1場面を表現して新約を旧約に結び付けている。

第一幕イエズスのエルサレム入場から始まる。舞台はロバに乗ったイエズスに群衆が棕櫚の葉を持って付い

て行く。羊 10 頭、ヤギ 10 頭、駱駝2頭も行進。数百人の群集が 55 人のオーケストラをバックに賛歌をうたう。以下受難劇は続いてゆく。山上の垂訓、ベタニアでの癒し、最高法院での判決、ユダの苦悩、十字架の道行、磔刑、復活など。

神様への感謝の気持ちをいつまでも持ち続け、神様と共に生活していくことは、素敵なおことですね。
この劇のWebsiteは<http://www.oberammergau-passion.com> です。

7/17(土)・18(日)研修会「現代典礼のあり方について」に参加して

7月17日(土)、18日(日)の二日間に亘って、「現代典礼のあり方について」と題して上智大学神学部准教授 具正謨神父様による典礼についての研修会がありました。典礼の奉仕に関わっている方だけでなく、ミサに与る信徒の方々にとってもミサの流れやそれぞれの意味についての理解をより深めることができた研修会であったと思います。

ミサは共同で捧げる祈りで、すなわち「私の隣にいる人を意識する祈り」であること。それゆえ、一堂に会した私たちが心を合わせて神に向かい、一緒に歌い、一緒に唱え、皆が共同で行うことが大切だということを、この二日間を通して私は心に留めています。具神父様は私たちの質問に対して誠実に、丁寧にお答えくださり、また、具神父様ご自身の体験についても分かち合ってくださいましたことに感謝いたします。六甲教会の典礼に携わる私たちが目指していくべき方向性を与えていただいたと感じています。(典礼部 橘)



7月25日(日)青年会・婦人会・壮年会合同交流会 報告

7月25日(日) 11:30~14:30イグナチオホールで、『一つの行事を信徒各会(青年会・婦人会・壮年会)が共同で実施することにより、お互いに教会内のいろいろなひととの交わりを深める』ことを趣旨として開催しました。参加者数は70名、松村神父様、コリンズ神父様、安芸神父様も参加いただきました。

初めに壮年会のメンバーでもある塚崎さんの著書『旅力』を主題としてお話を頂きました。昔なつかしい『遠くへ行きたい』を自ら歌われたあと、ベトナム戦争当時の1973年に初めてベトナムへ渡ったのを皮切りに、アメリカの大陸横断道路ルート66を旅し、その後インドの今のムンバイを訪れたこと。そして間を置いて2006年からミャンマー・ラオスなどヒマラヤのふもと、百越といわれチベットを源流とするメコン川の流れるインドシナの地域の旅をご自分で撮影された写真の数々を使いながら語ってくださいました。日常性から脱出し、自由を得て未知な世界との出会いの中で自分を再発見する。困難な状況に出会っても折り合いをつけ、克服してゆく中で元の世界に戻って来た時には自分の中で何かが変わられて力となっていることに気付く、それが旅の魅力であるということ。『旅することは生きること』という童話作家アンデルセンの詩や、ミャンマーで、

手製の風車(かざぐるま)を持った少年との邂逅を詠った自作の詩の朗読は心に迫るものがありました。

その後、①社会活動部から8月14日(土)に中央教会で催される「りゅうりえんれんの物語」のピアノ弾き語りコンサートの案内と、<自閉症の子供たちの支援>署名活動、②オルガンチームからは、9月4日(土)に催される「東梅田教会から無償提供頂いたパイプオルガンを使っのコンサート」の案内と、東梅田教会へのお礼献金の話がありました。

その後、全員で写真の撮影の後、コリンズ神父様先唱のお祈りに続き、川合評議会議長の音頭で和やかに懇親会にうつりました。食事をしながらひとしきり交流の進んだあと、各部会長からの報告がありました。



<壮年会 塚崎さんのおはなし>

壮年会(桎木会長): 今後もこのような合同のスタイルで六甲教会の力を結集する機会が増えることを望みます。10月17日予定の大いに語ろう会にもふるってご参加ください。

婦人会(久野会長): ホスピタリティをモットーとして活動しています。

青年会(村田会長): 他の教会とのつながりも大切にし、発展させて行きたいと思います。

中ほどで青年会のリードで音楽に合わせたリズム体操やジャンケンゲームがあり楽しいひと時を過ごしました。最後に松村神父様の先唱でめでたしを唱和して閉会としました。



なお、当日設けさせて頂いた会費箱に11200円の志があり、青年会の活動資金として扱わせて頂きました。ありがとうございました。

(壮年会 飛石)

<みんな揃ってリズム体操>



<合同交流会集合写真>
世代を越えて



—・— —・— 墓地委員会からお知らせ —・— —・—

主任司祭 松村

7月7日、今年度第一回の墓地委員会を開催しました。委員のメンバーは、長峰墓地使用者より選出する4名と今年度から墓地管理台帳の整備ならびに管理費などの業務を担当する教会受付事務所の3名から構成されます。

ここに至るまで墓地委員としてご奉仕して下さった方々に、遅ればせながらこの紙面をお借りしてお礼申し上げます。これからもご提案頂戴できれば幸甚です。また、諸先輩方のご奉仕の實りを受け、快くお引き受けくださりご奉仕して下さる福田信三、前野隆司、志水登美子、小西弘子の4氏にも改めてお礼申し上げます。

さて長峰墓地は、六甲教会に所属している方だけではなく、六甲以外の信者の方々にもご使用戴いています。また墓地委員のメンバーは、常に教会に常駐していないことから、定期的に出される文書に対する問い合わせがあり、それに対応できないケースがありました。そうしたことから、墓地業務円滑化のため久保憲一さんのご協力を得てこの度、墓地管理台帳もデータベースにて処理可能として戴きました。

そこで今回墓地委員会より提案があり、以下のように業務分担を決めましたのでお知らせします。

- | | |
|------------------|-------------------------|
| 墓地委員会の役割: | ① 墓地の整備計画と手配 |
| | ② 申込者の区画割当 |
| | ③ 管理費請求書作成と発送事務 |
| | ④ 春秋墓参のお世話 |
| | ⑤ 墓地管理規定の管理 |
| | ⑥ 共同墓地申込受付ならびに墓碑銘に関する事務 |
| | ⑦ 業者ならびに長峰墓地管理者との窓口 |
| 受付事務所の役割: | ① 墓地管理台帳の整備 |
| | ② 管理費受理確認事務 |
| | ③ 諸費ならびに使用者等への支払い事務 |



みんなの広場

父の着ぐるみ

「あと一年の命です。たぶん次の夏は越せないでしょう」

6年ほど前、病院の準無菌室で力なくベッドに横たわるわたしに医師たちはこう告げました。ところがわたしは奇跡的に小康を取り戻し、その時見舞いに来てオロオロしていた父を逆に介護することになったのです。

しばらく入退院をくり返していた父の癌は全身に転移し、これ以上積極的な治療ができないということで、担当医はホスピス行きを勧めました。そこで父は「在宅ホスピス」を選んだのです。とは言え、たった一人の介護者で

あるわたしが病弱。まともに考えると「ムリ！」です。なぜなら当時のわたしは肺炎を病んだり、腫瘍の摘出手術を受けたりで、まだ人を看護するどころではなかったからです。

でも「父の介護を在宅で！」という神さまのお望みに抗うことはできませんでした。「何でこんなことに・・・入院してくれたらどれほど・・・」当時のわたしは不機嫌なまま、仕方なく父に仕え始めたのです。ところが、父が度々口にするこぼしがわたしの心の向きをゆっくりと変えていったのです。「しあわせやね～。ありがたいね～。ゆりちゃんもしあわせやね～」と冗談交じりの口調ですが、発せられた“こぼし”は聖霊を受けて“現実”となっていたのです。ついにわたしの思い違いが矯め直されました。ヨハネ 20 章のマグダレナのようにわたしの目が開かれて、現状はかわらないのにその中に潜む真実が見えてきたのです。わがまま放題の父の中におられるのは孤独な花婿キリスト！忙しいわたしを 10 分おきに呼びつけるのは善き牧者イエスさま！食べこぼし、食べ残すのは幼子イエス！静かに眠るのは船の艦の方で眠るわが師！そう、そこにいるのは父の着ぐるみを着た“あの方”だったのです！

こうなったら降参です。ただただ、押し寄せる恵みに応えるだけ。でも現実には、わたしの信仰も徳も体力も時間もナイナイ尽くしなので、倒れたり転んだり。そこで神さまは、み旨の実現のために自ら手腕を振るわれました。我が家から歩いて 5 分のところにある在宅ホスピスの医療チーム。その道の権威でいらっしゃる関本先生をはじめスタッフの皆さまが、介護者であるわたしを力強く、愛情をこめてお支えくださいました。その上、次々に寄せられる励ましのおこぼし、あたたかいお見舞いや助け、気晴らしに誘ってくれる友だち。そして何よりも時間と空間を超えた熱烈なお祈りがみ心を揺さぶり、父とわたしは何とか支えられたのです。

また特筆すべきは三人の甥っ子たち。週末には泊まりがけでやって来て、おむつ交換や入浴介助を手伝い、ジイジと語らい、わたしにはとても及ばない愛を父に注いでくれました。「ゆりちゃん、いつもたいへんだね」と陰でわたしを労ってくれたのも幼い彼らでした。

父は今年のお正月ごろから、体力・気力・記憶力・判断力・・・神さまからいただいたものをゆっくりとゆっくりと手放し、神さまにお返ししながら、旅立ちの準備を進めていたようでした。

「ジイジ、天国はいい所よ。でもね、そんなに早く行かなくてもいいのよ。もっともつここにいて・・・」物心ついて初めて、父に甘えて泣きました。呂律が回らない口で「ウレシイ・・・シアワセヤ・・・」と語りながら、父はわたしの頭をなでてくれました。数日後、自宅のベッドの上で孫たちからからだをさすられ、声掛けられる中、与えられたいのちを生き切りました。「これぞ、在宅ホスピス！」と言わんばかりの最期でした。

こうして父は“死”という薄いヴェールを通して“まことのふるさと”へ入りましたが、彼はきつとこちらの世界にいたときから天国を味わっていたと思います。

神さまのあわれみと人々の祈りによって、この地上に“神の国”が実現することを目の当たりにした数年間でした。心から賛美と感謝！ 合掌。

(古泉)

ベッカさん

6月27日のカトリック新聞で神様が木村信行(ロバート・ベッカ)師を懐に召されたことを知った。

師は嘗て中間期に六甲学院で英語と訓育に当たっておられた。特に親交があったのではないが思い出すベッカ神学生は、イエズス会の神学生には珍しい(!?)単純な性格であったように見受けた。

六甲の卒業生や中間期に六甲で働いた神学生が叙階されると直後にこの教会でいわゆる「初ミサ」を捧げる習慣であった。ベッカ師は1960年3月20日に初ミサを捧げられた。そのミサが終わって珍しいことがおこった。嘗て師の薫陶を受けた生徒たちが聖堂の前庭で師の前にひざまづいて祝福を受けたのである。これはそれまで見なかった光景であった。

神様はみ栄えのために尽くした司祭たちを次々にご自身の懐に召しておられる。同時に、継ぐ者を呼んでおられるに違いない。

が、しかし？

(ヨハネ 三好)

納涼の夕べ



8月21日(土) 18時~20時(雨天決行)

今年も夏の夜のひとときを一緒に楽しみましょう。

ご家族・ご友人を誘って、ご参加ください!



広報部員のつぶやき

「暑い、暑い、暑い。」まず口から出るのはこればかりの毎日が続いている。梅雨明けとともにやってきた今年の夏は正しく猛暑。(ちなみに「猛暑」は、ここ数年で頻繁に使われ始めたと聞いた。そうだとすれば、数年前の夏はここまで暑くなかったということ? 確かにこんなひどい暑さではなかった...ほんの数年前まで)

とはいえ、子供たちにとっては楽しい夏休み。海に、山に、花火に、盆踊り、いろいろな計画でワクワクしていることだろう。大人にだって、楽しい夏には違いない。たとえ子供たちのように長期には休めないとしても。子供も大人も、とことん遊ぶのもよし、勉強に励む(?)のもよし、家でのおんびり・だらだらするのもよし、短い夏をそれぞれのやり方で大いに、悔いなく楽しんで、日々の活力に!

FadA

教会報9月号の発行は、8月29日(日)です。

編集会議は8月22(日)です。

記事原稿は、8月15日(日)正午までに信徒会館
受付へご提出願います。(広報部)

<http://www.rokko-catholic.jp>

カ ト リ ッ ク 六 甲 教 会

〒657-0061 神戸市灘区赤松町3-1-21

電 話 078-851-2846

発行責任者 松 村 信 也

編 集 広 報 部